メディアとしての空間(1)

「怖れる空間について」

デザイン学科・スペースデザインコース

定　松　修　三

A Study on Space as Media (… the fearful space)

by Shuzou SADAMATSU

目　次

序
　空間のメディア機能
　畏怖する空間の存在と意味
1章　人・もの・空間にまつわる恐れ
　身体空間における恐れ
　自然空間における恐れ
　暗闇の空間を恐れる心
　人間の業を恐れる心
　人間が造りだしたものへの恐れ
　恐れる心の流布と伝承
2章　空間言語としての「恐れ」
　あとがき
　参考文献

序

空間のメディア機能

人間は本質的に空間にどう関わっているのか，その関係はそう単純ではない。もちろん，複雑にするも単純にするも人間次第であるが…。

人間は空間を，単に身を守り，覆うものとして用するにとどまらず，表現媒体としての特質を活用する。人々はしばしば空間を衣のように被ると喩えられる。なぜ被るという言い方をするかと言えば，空間は個を語るいろいろな要素で構成されているからである。

人間が所有した空間は人間の表現メディアとして必然的に機能してしまう。特別に探索するまでもなく，思いが向きさえすれば，対峙する空間に眼をやるだけで，そこにいろいろな個人的資質が表出されていると分かる。

われわれは空間に人，即ち，年齢，性別，性格，教養，等を読み，更にはオーラまでを感じ取る。

そればかりか，もし人が未知の空間に能動的に関わろうとすると，空間はその人の心象そのものともなる。即ち，空間は心の器でもある。

従って，空間の物理的な形象はもちろんそれに深く関与するが，どうかすると空間形象に関わりなく人の心を縛する。

それは、空間が介する〈何か〉が人の心に浸透し，動かすのだと考えられる。そのことは相対するわれわれ自体の幻想のレフレクションに過ぎないという見方もあろう。たとえそうだとしても，その空間が介在している以上，われわれは空間が持つメディア機能を無視する訳にはいかない。

こうした関わりは，決して今日的な現象ではない。古代も今も人間も空間もその資質はほとんど変わってはいない。

しかし，全ての社会がそうという訳ではないにしても，現代における社会状況には，一部に極めて特異な様相が表出してきていると指摘せざるを得ない面はある。

例えば，空間による情報操作なども今日では日常的におこなわれるようになってきた。

加えて，現代社会では一人一人の個性表象の意志が強くなってきていて，その一手段としての空間的表象を個人レベルでも意識し合うようになってきた様子がうかがえる。

また，そういった個人的（競争の）関係づくりが広く形成され，生活環境においては，〈量より質へ〉，〈機能よりも意味を〉という選択傾向が広まる。

すると，巷間では空間に消費記号的なものがまとい付き，人々の心を捉えるようになる。

今日，われわれは人間環境を考察する場合，空間のメディアとしての機能価値を正面に据えてかからなければならないと考えるのである。

畏怖する空間の存在と意味

人間は自然を征服したのか。真実はどうか，改めて問いかければ，すべての人は否定的に答えざるを得ない。しかし一方では多くの人々は優越感をくすぐる言葉を安直に受け入れ，自然の中にもはや恐れるものはなく，未知な部分をあえて拡大視する必要もなし，危険，不安は遠避けて触れずにおけばよい心理になる。

しかし，ほんの一世紀以前には，われわれの生活は未だ多くの未知，不明な現象に包まれたままであった。半世紀前ですら自然征服という語は夢を描き楽しむための言葉でしかなかった。

生活環境のほとんどが未知なものに覆われていたときには，人々の日常は〈不安を感じさせられる空間を意識した暮し〉そのものであった。その生活環境の中の，恐ろしさを感ずる空間は人々の行動を自然に規制していたと考えられる。家の中での安全も，その家の中の空間のあちこちに畏怖すべき見えない神を奉らなければならない程，恐さはそこかしこに潜在した。人々は分をわきまえて，畏れながら暮していた。そういう生活であった。

そのような時代の，空間に対して謙虚にならざるを得ないような人々は，もう当然ながら今日にはいない。

それで，今日は恐ろしい空間は無くなってしまったのか，危険が立ち入る隙も無くなったのかというと必ずしもそうではない。

今日でもわれわれの生活環境の中には〈危険〉な空間は依然，多く存在する。かえって増えたと思われる所もある。ただ，多くの人々はそれに対して過大な想像を止め，最小限の危険予測をもって恐れることをしなくなったのである。

それは一世紀，半世紀の経過の中で，人々が科学的という思考を強要し合い，生活の中から不安を追い出し，恐れの気持を持たないよう努力してきた結果であろう。その結果，危険にまるで心を遣わない生活態度を自身で恐れ，そのような生活態度こそが危険なのだという指摘をしているような現象もある。

そればかりか，かっての人々が危険を案じ，恐怖を感じ，不安を抱き，恐れながら生きるという，いわば生活の陰となる部分を数多く意識させられたことは，単調な日常の中で，人々の心の振幅を精いっぱい大きくし，生きる喜びを感じさせていたのではなかったか，そう言う人々もいる。

さて，そのように，今日，われわれの生活環境にいくらかの反省の気風も生じ，そのせいか，人々の好みの上に懐古的空間美意識が散見される。

そうしたことの背後的心因には，思い上がりによる保護維持的動機もなきにしもあらずだが，多くは自らの生活環境の悪化を感じ，その危機感を真剣に受け止めている心情がある。

その懐古的空間美意識には，陰の性質を有する空間に関心を寄せる気風もあるのだ。

当小論においては，われわれが〈畏怖すべき空間〉と感じられるものを取り上げ，人々との関わり，またその普遍的特性を考察し，その意味するところを明らかにしたい。

1章　人，もの，空間にまつわる恐れ

身体的空間における恐れ

われわれはふだん無意識にも身の周りに空間をとり，安全を確保する。しかし，その空間は物理的防壁ではむろんない。力の弱いものはすぐ打ち破られる。従って，弱いものほど身の周りに大きな空間をとる。たとえ強いものでも身に危険を感ずるときはわが身の周りに大きな空間を取る。また，自分を威圧する，或は危害を加えるかもしれない相手によってもその空間の大きさを増さなけ

ればならない。

このように，身の周りの空間はバリアブルである。いうならば，身の周りにほどほどの適正空間を保って居られる時は，身を置くその空間全体は，基本的に平穏，安全な空間なのである。

もしわれわれが見知らぬ外国の地を歩くことになった時，そのときは平常のときよりも大きな間を取って周囲に気を配りながら歩かなければならないだろう。その地はわれわれにとってやや恐れを伴う空間のようだからである。恐れとはいささか大袈裟に過ぎるとしても，何程かの不安を捨て去ることのできない未知の空間なのである。

このような身体空間は，即ち，生物的次元での対人恐怖が表出したものである。そこで対人関係においては常に一定の信号が交わされ，即座に優位劣位が秩序づけられる。それらの関係は，未知の間柄ではわずかながら不安を伴う。そこで同時に，相手に不安を生じさせない信号(笑顔，挨拶など）を送り合う。その結果，それぞれの身体空間は平穏，安全な空間となる。この〈宥めの信号〉無しには人間の身体空間は〈恐れ〉に震え揺らぐ空間でしかないのである。

自然空間における恐れ

われわれ人間が考えれば自然の条件は常に不安定である。いくら状況を把握しようと努めても，それは悪あがきに過ぎない。解明できることには限界があり，それも些少な部分でしかない。当然，対処は常に万全にはできない。そこに恐怖心が忍び寄ってくる。

とはいえ，われわれは予知できぬ見えぬ災害にいつも怯え続けている訳ではない。たとえ現実に接近しつつある恐るべき災害であれ，イメージできないものには恐怖もわきたたない。

想像を掻き立てるものはむしろ卑近な自然であろう。遠くは神聖な鎮守の森がそうであったが，今日に続くのは齢を重ねた大木，鬱蒼と繁る木立，視界を遮る茂った草むら，深く淀んだ堀，堀の柳，土手の洞（ほらあな），渦を巻いている流れ，足を取り込む湿地，寂しい辻，人の気配の消えた山道，すっかり苔むしている林道，風の音の絶えない裏山そして人影の絶えたビルの谷間，等々，まだまだきりもなく挙げることができる，これらの，ものや場所である。

このような恐怖の立ち込める自然空間は，いたるところに無限に存在する。

一方，厳しい自然環境での場合，人々は全身全霊をもって対峙し，多大な労を費やし，時には負けることもある。

空間に恐れおののいて暮らしている例は多い。

北極エスキモーのピブロクトクの例を『人間と気候（佐藤方彦著・中央公論社)』で知ることができる。ピブロクトクとは別名北極ヒステリーと呼ばれ，始めは鬱状態から始まり，「突然，激しく興奮する。声を張りあげてわめいたり，怒鳴るようにメチャクチャに歌ったり，動物の鳴き声を真似し続け」たり「家具をひっくり返したり，食べ物をまき散らしたり，服を破って脱ぎ捨てたり」戸外で走り廻り，雪だまりや，薄氷の流れに入ったりして暴れまくる。やがて大の字にひっくり返り，失神する。そして，「眼を覚ましたときには，前のことはすっかり忘れてしまって，何も覚えていない」といった病状を示す。

大人の女性がほとんどで，かっては，いつも誰かがかかっていた程だったという。

飢愛原因説もあるようだが，気温と関係しているのではないかといわれている。

シベリア北東部に代表される北極圏一帯は「九月の始めに，もう，浅い川や湖が凍る。十月には一面が雪で覆われてしまう。夜が長くなり，寒さは厳しくなり，それが一月と二月に最高に達する。ついに日は昇らなくなる。暗黒と寒冷，死んだような静寂が支配する世界」だという。この悲惨な季節の自然に消耗し，神経をすり減らし，病気になる。「暗黒の静寂の恐ろしさは，暗い部屋に幽閉されたようなものである。圧迫感は刻々と耐えがたさを増す」とも記されている。ここまでくると，しょせん人間は勝てないのである。

自然に対するわれわれの恐れは，いまだ自然を征服し得ていない故と言うこともできようが，過

去の人類の長い道のりにおいて，全ての人々が身深く沈着させてきた自然観があり，その中にこそ自然に対する恐れの心がしまい込まれているとみるべきであろう。

その自然観とは，全てのものに霊を見，神の宿るを信じようとしてきた謙虚な生き方の，わきまえとも，モラリティとも言い換えることができるものだろう。

さて，人間が自然を恐れるのは，恐れる心で自然を見るからに違いない。太古の昔から自然に依存し生きてきた分，関わりの話が残り，手を下してきた分，恐れが積み重なる。

近年では宇宙飛行士が月面に至るとき，神の啓示を聞いた，人生観が変わった等の報告がある。広大な宇宙に飛び立った人の，よりどころの無い不安，例えば広場恐怖に近いものか，或は一種の感覚遮断世界に入ったものであろうか。

暗闇の空間を恐れる心

その感覚遮断としては誰もが暗闇を恐れる。

即ち，われわれは暗闇の中では距離感，量感，など既知の感覚を喪失してしまうからである。

動物達の多くは暗闇の中でもそうした感覚を失うことは少なくてすむ。

しかし，われわれは保護バリアーとしての身体周囲の空間をほとんど保てなくなる。特に視界像の喪失は大きな不安を呼ぶ。方位や基準が分からなくなるために自己の存在基盤までもが失われ，意識混乱が生じてくる。そこ生ずる不安はさまざまな幻想の既知の恐怖，たとえば殺人強盗，幽霊，騙し災いをもたらす狐狸等に対する恐怖として増幅する。そういったわれわれの暗闇に対する反応は多くの感覚遮断の実験で報告されたものの中からも理解することができる。

小田晋の『狂気の構造／青土社』にそのことが記述されている。

その実験における反応のいくらかを書き出させてもらうと，多くの被験者は「思考の脈絡が失われ，自分の身体像さえ崩壊し，離人感情（現実感の喪失）が起きる。人格の弱点が露出されて精神病のような状態を呈することさえ稀にはある」のであり，また「狭義の意味の幻覚ばかりでなく，錯覚，白昼夢，幻想などその周辺の諸現象が出現する」と言う。

また「なにか〈見えた〉という」人も多く，何を知覚したかといえば，「斑点とか，閃光とか，漠然たる音のような意味の無いイメージが起きてきたもの」，そして「事物，人びと，意味のある会話のような，意味のある知覚が生じたもの」までも少数は発現したと報告されているのである。

もちろん精神的機能の低下は否み難く存在する。

一方，感覚遮断の状況においては〈痛覚の過敏性〉が増大したともあるので，身体との何等かの接触するものがあれば，その恐怖は一層過大なものになることは容易に想像することができる。

ここで思い起こすのは各地の昔語りに必ずといってよいほど取り上げられている山男，山女，ザシキワラシ，雪女，そして狐に化かされ，河童に引かれた話などである。むかし，家の外の闇夜は既知の音も途絶えればまさに感覚遮断の実験箱の中と変わらないほどのものであったろう。そこで人々は数多くの幻想の体験をし，その幻想の語りが更に多くの人に暗示をかけ，「連鎖反応的に同じ場所，同じ条件のもと，同一の反射行動をとってしまう」『(菊池照雄・遠野物語をゆく／伝統と現代社)』ことになったと想像されるのである。

いまわれわれは『遠野物語（柳田国男)』を人間が恐怖におののいた心の物語として，むしろ懐かしく美しく聞く。

残念ながら，われわれの身の回りから大方の闇夜が失われてしまった今日であるが，すべて無くなった訳ではない。なおも多くの人々は深い闇をイメージすることができる。闇の空間に対する恐怖心は潜在しているのである。

ところで，われわれは谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』に島原角屋の屋内に関する次のような章を読む。「…僅かな燭台の灯で照らされた広間の暗さは，小座敷の暗さと濃さが違う。ちょうど私がその部屋へ這入って行った時，眉を落として鉄漿を附け

ている年増の仲居が，大きな衝立の前に燭台を据えて畏まっていたが，畳二畳ばかりの明るい世界を限っているその衝立の後方には，天井から落ちかかりそうな，高い，濃い，たゞ一と色の闇が垂れていて，覚束ない蠟燭の灯がその厚みを穿つことが出来ずに，黒い壁に行き当たったように撥ね返されているのであった。」また，次のようにその闇を装い綴る。「それは夜道の闇などとは何処か違った物質であって，たとえば一と粒一と粒が虹色のかゞやきを持った，細かい灰に似た微粒子が充満しているもののように見えた。私はそれが眼の中へ這入り込みはしないかと思って，覚えず眼瞼をしばだゝいた。」更にまた，その闇を次のように嘆ずる。「分けても屋内の『眼に見える闇』は，何かチラチラとかげろうものがあるような気がして，幻覚を起こし易いので，或る場合には屋外の闇よりも凄味がある。魑魅とか妖怪変化とかの跳躍するのはけだしこう云う闇であろうが，その中に深い帳を屏風や襖を幾重にも囲って住んでいた女と云うのも，やはりその魑魅の眷属ではなかったか。闇は定めしその女達を十重二十重に取り巻いて，襟や，袖口や，裾の合わせ目や，至るところの空隙を填めていたであろう。いや，事に依ると，逆に彼女達の体から，その歯を染めた口の中や黒髪の先から，土蜘蛛の吐く蜘蛛のいの如く吐き出されていたのかも知れない。」

それを美と感ずるか，恐と感ずるかは心次第なのである。

人間の業を恐れる心

人間は個々それぞれ，まったく個別の思考に基づいて行動する。従って，特殊な条件下の場合を除いて群れ行動は成り立ち難い。

しかも個と個の関係は常に不安定であり，自分以外の人間は計り難い存在である。

そこで完全な読み，完全な制御ができない他人は恐怖そのものと認識せざるを得ない。

このことは身体空間における恐れ，中でも対人恐怖としてあげたことにも重なる。人間の場合，やっかいなのは，生物的序列が形成されれば相互安全は十分かといえば，残念ながらそうではない。

他人は何を考えているか分からない，どういう行動に結び付くか分からない，そうした不可解さから与えられた恐怖を，人間は互いにいやというほど体験し，蓄積してきた。そうして，その不条理，不可解はありとあらゆる幻想を築き上げる役割を果たしてきたのである。魔女，妖怪，亡霊，等，場合によってそれらは奇っ怪な獣のかたちを与えられてはいるが，もとを糺せば人間の業によるものと，誰しもが理解するところである。

かくして，他人に対する恐怖は幻想としての恐怖に覆い隠され，そのなまな恐怖を凌駕するまでの幻想によって，むしろ弱められてきたのである。

しかし，われわれの潜在的空間恐怖には他の人間の存在が強く関わっていることは間違いない。

神の存在する空間も人間の業（ごう）の恐さ漂う空間の対極に見えたのか，或いは重なる恐怖空間として生じてきたのであろう。

人間が造り出したものを恐れる心

われわれは，人間自身が造りだした多くの機器及び環境が正常な感覚を超えて，不測の現象を招致することの不安を抱き続けている。

人工的機物の不測の事故に遭遇した者は，その凄惨な状況を脳裏に強く焼き付け，同時に，ただならぬ恐怖を味わうこととなる。

しかし，機物自体が幻想の対象になることは少ない。自動車事故の多くの場合は，自動車よりも道路或いはその周辺の自然が幻想の対象となるようだ。

著者の身近にあった例だが，郊外の自動車専用のバイパスに，そこをまたいだ歩道橋があって，その擁壁に人影が浮き出ている，その近くで事故死した人のものだといった噂が流れ，一時は恐る恐る見物に来る人が絶えなかった。何処にもあるパターンと言えるが，幻想の対象はもともと薄暗くて雑草が茂り，人々が近寄り難いような処が選ばれる。イーフー・トゥアンの著書『恐怖の博物誌〈Landscapes of Fear〉工作舎』の中には，「ヨーロッパと同じように，アメリカの辺ぴな田舎でも

亡霊がいちばんよく現れるのは人間が造った場所だ。たとえば古い家，廃屋，さびれた水車小屋，屋根つきの橋，田舎道などである。亡霊はまた，丘や谷間や森といった自然の環境にも現れる。」というような記述があるが，恐怖譚が取り付く対象は，特定の個人と密に関わる機物は避けて，差障りのない周辺環境の何かが選ばれるのである。家屋などもひと気がなくなると直ちに取り付かれる。人々は恐怖の想像，恐ろしいイメージが付くところを待っているのである。

「昼間見れば，樹齢百年を越すカシやカエデの木が，手を伸ばせば届くほど低く下枝を張り出しているのにすぎない。納屋がいくつかと，きちんと積まれた材木があり，歩道のそばまで長い草が茂って，秋の終わりに誰かが焼き払うまでその草を刈る人とていない。そこは暑い夏のさかりにも冷気が去りやらぬ日陰の場所だ。昼間はけっして恐ろしい場所ではないが，夜になると様子が一変する。寂寞としてものの形も見えず，音も聞こえぬ暗く無気味な場所と化し，無数の不安にとりつかれた子供にとっては，恐怖の場所となる。」

これは米国の作家オーガスト・ダーレスの怪奇小説短編『淋しい場所』の一節だが，子供たちの心がこの〈場所〉にもつれ絡んでいく話の筋は，誰の幼少時にもある経験の一つなのである。

身の周りの建物の陰，部屋の隅，どこであれナイーヴな心がふと幻想を呼び込めば，そこは恐ろしい空間に変身しかねない。

ではその建物や室内の〈恐れる空間〉に視点を当ててみよう。建物は時としてわれわれ生身の人間になぞらえて考えられる。生き身か，死に身か，そして，死に身は人間同様恐ろしいものと化す。

ながらくひと気がなく荒れている家屋，或いは廃屋となり朽ちかかっているもの，それらは妖怪が格好の棲み家とする。

また，住人がいても古い家屋では何処かに妖怪が共棲している。自然化した姿は自然そのものよりも恐ろしい空間なのである。

しかしまた，古いばかりが，恐さを呼ぶ空間である訳でもない。

松本小四郎が「日常の物語のなかの〈家〉鈴木志郎康『家の中の殺意』をめぐって」という題で鈴木の同名の詩を基に住宅論を展開していて，その詩に描かれた新しい自宅はどうやら著名な建築家，ストイックな空間を設計する篠原一男に依頼したものらしいのだが，まず詩を紹介している。

「……
私は家を持った
新しい家に移った
食堂のような広間には音が響くのだ
コップを置く音が響くのを恐れる
紙をめくる音が響くのを恐れる
この空間の贅沢に私は恐れる
……」

この詩は一遍まるまる掲載されているのだが，ここではほんの一部だけにとどめなければならない。

とにかく，松本の論の中には「それまで暮らしてきた日常を新しい家の構図に嵌め込む作業は，まさにジグソーパズルのそれであろう。新しい家に住むことは，したがってからだを棲み込ませるだけでなく，家族の関係の構図をそこに嵌め込むことを意味していることになる。新しい家に対する恐れや，妻や子供に対する敵意や殺意は，それまで慣れ親しんで来た日常の構図を新しい空間に嵌め込もうとするときに起こる，新しい家に固有な事件なのである。」と記した部分があり，ここではこのことを俎上に乗せる。

もちろん鈴木は，〈恐れる〉だの〈殺意〉だのを詩に並べてはいるものの，やっと手に入れたこの新しい空間がいわゆる〈恐怖空間〉であると言っているのではない。建築家の観念的な空間とそれを私有した自分をアイロニックに，喜びと一緒に反芻しているに過ぎないだろう。

しかし，未だ馴染んでいない空間は，日常の型が隅々にゆきわたるまで落ち着かないことは確かだ。その意味で，不安，不気味さは間もなく解消するには違いないが，松本の言うように，この空間は一時的には新しい空間特有の畏怖すべき空間と言えるのかもしれない。

さて，新旧に関わらず，部屋は本来身を守るべき，安泰の空間である。しかし時には人を寄せ付けぬ，畏怖すべき空間に変容することもある。〈使われざる部屋〉がそうである。

この〈使われざる部屋〉は，作家の清水邦夫が『火から遠い沈黙』というエッセイの中で記している。「その部屋は常識的には客間であったが，実際はあまり客間には使用されなかった。…その部屋はほとんど使われないので黴臭くて，どこかじめじめした感じで，しかも金箔のはげた屏風がはりめぐらされていたので，なにかしら寺の一室のような雰囲気があった。父の生家には，ぼくとほとんど年齢の違わないいとこがいたが，彼にいわせると，なにかいたずらをやると，それも第一級のいたずらをやると，この部屋へとじこめられるとのことだった。…とにかくぼくらは鬼ごっこや隠れん坊をして遊んでも，その部屋だけは使わなかった。その部屋の前の廊下を歩く時も，どこか足音を秘めるようなところがあった。

ある夏，先述のいとこが伝染病にかかった。

すると家人は，そのいとこを例の部屋へ寝かせた。数日後，彼はあっけなく死んでしまい，死後すぐにその部屋に大量の消毒薬がまかれた。部屋から白煙がもうもうと吹き出してくるのを見た時，ふとぼくのなかに奇妙な思いが走った。うまくはいえないが，いとこがその〈使われざる部屋〉で抹殺されたような奇妙な感覚にとらわれたのである。もちろんそれは思いすごしには違いないが，みんなが忌みきらう伝染病になったとたんすばやくその部屋へ病人を移したさまを見ると，看護という意味もあったろうがむしろ〈閉じこめた〉といった感じが強かった。とにかくいやなもの，困るもの，迷惑なもの，都合の悪いものを閉じこめる，そういった空間としての部屋」なのである。

このように，因縁がまとわり付き，子供らを恐がらせるような部屋は，年を経た家屋であれば，家族構成が変わり，世代も移り，先代が愛用していたそのままに置かれている部屋など，謎めいた部屋のかたちで存在している。長い間病人が寝ていたり，死人が出たり，気が触れた人がいたりなどと，無責任な人々の口の端に乗ったが最後，その部屋が恐怖の幻想で包まれてしまうこともあり得るのだ。

また，清水は「ふだんなら〈こわい〉と感じて，むしろ近づかないところ…日頃ひとりでは敬遠していた一劃」である孤立した場所，つまり押入，便所，蔵の中，階段あるいは階段のかげなどは，子どもたちが「叱られたりすねたり，あるいは自己主張を通したい時にこもる」場所であったと述べている。そこもまた〈使われざる部屋〉の〈気〉の漂う場所として捉えているのである。

また，同じ在所での経験で，町屋造りの歯医者の家屋が土蔵に自分達の精神病の息子たちを閉じ込めていたこと，その病人達は庭では叫び，暴れたりするが「土蔵の中ではしーんと音もたてずに暮らしていた。格子の窓から見える顔も，日によって白っぽかったりそうでなかったりしたが，彼らの表情は一様におだやかであった。」ことを描いている。そして，土蔵は通常の生活の中で，既に〈使われざる空間〉になっていたこと，但し，「蔵をこわすことに皆が本能的な怖れをいだいていたことは事実のようだ。蔵の中の沈黙と闇に畏怖の念をいだいており，あまりふれてはいけない，そこの空気を乱してはいけない空間と感覚していたわけだ。しかし先に，土蔵には狂気をしずめるなにか磁力のようなものがあるのだろうかとぼくはいったが，それから少したつうちに考えも違ってきた。狂気をしずめるような力ではなくて，狂気をさらに狂気たらしめるような力が働いているのではないか。そのような狂気の磁場にいるがゆえに，格子の中の彼らはああもおだやかな表情をしているのではないか。そこで彼らはいろんなものから解き放たれて，たとえば〈家〉からも解き放たれてある種の自由を獲得しているのではないか。…」と，深い洞察による空間考察を述べている。

さて，この〈使われざる部屋〉に対する空間感覚は，もちろん，わが国に限るものではない。

多くの国で閉ざされたままのドア，そして，誰

もいないはずの部屋から聞こえた物音，ドアの隙間から洩れる明り，などを取り上げた恐怖話には事欠かない。

当然，暗い，じめじめした，かび臭く蜘蛛の巣の張った陰惨な空間のイメージは世界共通の恐怖の種になるのである。

恐れる心の流布と伝承

地球上の動物の絶対多数は，人間の眼からすれば，常時，身の危険に曝されながら生存しているように思える。もしも彼らが人間のように，生命の危機の予測に恐怖を感じながら生きていると考えると，それこそ絶え間ない恐怖におののきながら生存せざるを得ないだろう。真実は答えてもらえようもないが，自然の中で生きている限りにおいては，予測思考が彼らの頭を支配し，それによって神経症に悩むなどといったことは，恐らく，考えられない。人間のような極端な幻想的恐怖を持つことはないのではないか。

それに対し，自らの死の（予測した）恐怖こそ極限の恐れとする人間は，その大なる恐れに対し，日常の中で小なる恐れを身近にたくさんばらまいている。そうして，恐れの天秤のバランスを取ろうとしている気配がある。

しかしながら，時代の推移と共に，小なる恐れは少しずつ減衰し，日常生活からも撤退して行きつつあるように思えてならない。

もちろん恐れる心が人間の中から失われようとしている訳ではない。なぜなら人間は常に恐怖を学習するようになっているからである。

世間では，われわれは子供の時に親から恐怖を与えられ，恐怖の世界を知り，以降，恐怖に縛られて生きていることになるとよく言われる。

もちろん，現代では親子の関係が変わってきたという指摘があることも考えなければならないが，本質的な変化はないと思われる。

人間は支配・被支配欲に基づく行動を取る。被保護者は保護者の支配傘下に入ることを意味している。そこで，保護者は外部の恐怖をつくり与えるなど，統率を容易にするような行動をとるが，それはいつの時代においても有効である。

国家という形においても，さまざまな組織体においても，家族においてもそれは変わらない。

親の多くが子供を抑えつけるために恐怖心を利用するのは，世間で言われている通りである。

そして確実にそこから恐怖の物語が始まる。

確かに，植え付ける恐怖の内容は時代色を帯び，少々変質しているかも知れない。

だが，恐れる心を呼び覚まし，また恐ろしがらせることで人間関係の秩序を巧みにコントロールしようと意図することなど，変わらず続く様子をみれば，人間の本質が時代によって変わって行くことなどは多分ない。

さてここで，人は何を恐れるのか，恐れの心の本質を少し問うておかなければならない。

〈恐れ〉に対しては，先出したイーフー・トゥアンの『恐怖の博物誌』において多彩に語られているので，あらためて記述するのははばかられるが，後述の必要から，いくらかの考えを記すことにしよう。

われわれの心の中に，ひとたび不安にもとづく心理的緊張が起こると，警戒心で萎縮するような複雑な感情が湧き，心を捕縛するが，そのような状態にあることを恐怖に襲われていると，われわれは感じる。

もちろん，恐怖の感じ方は個人によって差がある。臆病な人から豪胆な人まで千差万別であり，恐れを感じるその内容にも多様な個体差がある。

不安は普段と違う出来事に遭遇することによって喚起される。その不安に伴う漠然とした恐怖感はどうして生じるのか，それは人が人であるが故の想像力によるものがほとんどであると言う。

人が予測したり，予感したりすることが可能な能力は，容易に幻想の世界と結び，妖怪や幽霊などの具体的な恐怖の対象物を数多く作り出す。

それらももちろん，人が他の人や動物を恐れるところから生出してくる。そしてそれらの存在が恐怖空間を生み出す。

ただし，その恐れは必ずしも実体験によって植え付けられるものではない。むしろ語りとか書物

によって伝承され種を蒔かれたものが大きい。たまたま恐怖体験があるとしても，その多くは仮想的に体験させられた結果，意識の底に植え付けられたものであることが多い。従って，実体のない存在でもその存在を意識させる空間が恐怖の対象になり得るのである。

『恐怖とは何か』を著した村瀬学の言うところは，社会倫理上の恐怖，即ち，生活習俗，思考が，異境に踏み込み，対応不能になることや，また，その境界を克服できないところから生みだされる恐怖である。それも空間恐怖の様態と重なる。即ち，空間恐怖も境界に関わることが多いのである。

われわれは未知の空間に遭遇したとき，その意識の底に眠る漠然としたさまざまな恐怖の対象物が目覚めてくるのを意識する。そしてまた，その小さな想像の種が一度芽を出すと，今度は際限なく茂り猛けるのである。

想像による不安の種には自然の中のわれわれに危害を与えるかもしれない恐ろしげな動物の存在，或いはまた，これまでの経験の中におさまらない未知の何かが起こり得ることの想像，また，人間が作り出した怪奇な空間の中で，われわれを襲おうとしている数々の敵，得体知れず不気味に見える他人の様子，荒れ狂って見える未秩序な状態，混沌，誘い込む迷路，どこかいつもと違う不穏な状況に対する不安，等々がいっぱいに詰まっている。

そしてこれら空間に対する不安，恐怖は想像の種の中から，膨らみ弾け，勢いよく流れ出してくるのである。

2章　空間言語としての〈恐れ〉

さて，空間がメディアとして機能していることは，先述した通りである。

即ち，人々はその空間や部分に表出されているもの，または比喩（隠喩においても）されているものを読む。意識して読み取らずとも，その空間に接すれば，即，生理的，感覚的な反応を生む。そして，このように，空間を通して何等かのコミュニケーションがなされる事実があればメディア的働きを認めない訳にはいかないことも先述した。

但し，〈表現する行為〉と，〈意味を読む行為〉が共になされるようになって，空間がメディアの役割を受け持つ意味が出てくるのである。

そこで，単に，意味があるのを意識するというよりも，積極的に意味を表出させることに意味が生じてくれば，表現記号体としての〈空間言語〉が必要となってくる。

しかし，現在，〈空間言語〉は形成されつつあるとは言い難い。ところで，建築言語という語彙が既にある。但し，これは建築の形態要素を言語のように用し，それらに対する文法を形成することにおいて建築計画に一定の秩序をもたらすことを目的としているものと言える。例えば，『建築の形態言語』を著したウイリアム・J・ミッチェルはデザインを実施する上で，雑然と無限に存在する形態要素を適切な選択肢を与える文法によって組み立てるようなデザインシステムの導入を提唱している。

こういった，〈建築言語〉という語の目的は形態の生成の法則化ないしは秩序づくりに有効かどうかであって，意味の生成に立ち入るものではない。つまり，文法の原則は，形態を形成する部分の加減乗除的公式とでも言えるもので，設計計画のシステムをその公式に当てはめるようと意図するものである。即ち，生成される形態が複雑化しても秩序（建築機能などの）を消失しないよう機能させようというのであろう。

従って，言語に置換して共通概念を形成する意図も，その付随的働きも期待できるものではない。

ところで，一方，コンセプトに氾濫するキーワードのように，使用頻度の少ない言語をシンボリックに用いたり，多くの意味内容を一語に託したりするような，いわば思考遊びに偏した言語置換をおこなっても，それでは，正当な形態概念を築くことはできない。

しかし，今後，空間のメディア機能を有意味なものにしようとすれば，空間形態を象徴的記号としての言語に置換するシステム，またそれらを一定の文法に則して組合せ，統合し，場合場合の概

念を築くことなどが，恐らく必要不可欠なことになるであろうと思われる。

ここで〈畏怖すべき空間〉の言語形成のために，不安，恐れを伴いやすい形態要素を列記してみよう。

まず，空間分節と枠組みがいずれも曖昧，不明な空間はそれ自体，不安・恐怖の種となる。則ち，垂直水平を崩している空間，自然との対応がなく，方位など計り取り難い空間，変形している空間，開口部などの大きさが統一されていない空間など，要するにイリュージョンを抱え持っている空間はこれに該当する。

さて、通常の空間ならば敷居，開口枠などの境界がはっきりしていて当然である。しかしもし，内外の境界が定かでなく，自然石や植木を結界として意味づけするなど，領域を明確にしない空間は人の心を不安定にする。また，開口部の隙間など，護りが強固でない空間，あるいは強固であっても素通しのガラスの中で，外からの視線に曝された空間などに，われわれは強い不安感を感ぜずにはいられない。

また，暗い，陰鬱な空間，寒い，冷感（気）漂う空間，無人となった空間，古いものに埋め尽くされた空間，空虚感を印象づける空間，ほこりの積もった空間，荒廃している空間，崩壊してしまった空間，色彩も何もない空白の空間，無音を意識させる空間，聴き慣れぬ音が響く空間，音が不気味になり声が割れたりする空間，黴臭い空気に圧迫されるような空間，どこからとなく腐敗臭などが漂ってくる空間，閉じているのにすきま風がすっと抜けていくような空間，迷路のような空間構成，見通しのきかない通路，複雑な部屋（間）取り，無機質に取り囲まれた空間，肌に馴染まない材質や色彩で構成された空間，階段やアルコーブなど大きな凹凸のある空間，陰の部分や隠れ場ができやすい空間，高所の空間，或は地下の閉じ込められた空間，等々，こうした空間の状態は，恐さの要因を多様に抱えもっていると言えるだろう。

ところで，このような空間の状態を未整理のままこうして並べてみると，これらは決して特殊なものではないと分かる。

むしろ，平生よく有り得る状態なのである。新しい空間でさえ例外ではない。

建築雑誌などを見ると分かるが，より異様な空間を施主と建築家は勇んで造り競っている。一般的な観点からは，どちらかと言えば恐怖空間言語系形態に属するような空間を進んで採用しているのはなぜか，実は人々は恐怖に近似する感覚を決して嫌ってはいないのである。むしろ恐怖的感情からもたらされる精神の緊張を，進んで求めていると言ってもよい。

病的な神経症に陥る一歩手前までは，恐怖感は生の昂進にも効あるものと捉えられる。

ただし，正常な状態で空間デザインを実施する以上，もちろん〈恐怖空間〉の表出を目的とすることはあり得ない。しかしもし，先取気鋭の人々が先進性，独自性，顕示性のデザインを望み，まま，前衛，神聖なデザインに憧れ，いわゆる冒険をすることなどがあれば，その結果，たまたま異風を招致することもあり得よう。

そしてまたストイックな感覚の人たちになれば，潜在意識において自らの精神に対峙する厳しさを求める内に，ある種の恐怖形態さえも期待してしまうことすらあるかもしれない。

空間言語においては恐怖空間も前衛空間も連続し，境界は定かではないと考える。

そうした意味では空間領域での言語体系を区切って組むことは不可能かもしれないが，一般的に言って，空間における表現体としての含有意味を活用するためには，明らかな形態を示す言語とその言語量を把捉し，近似，類似語，反対語等の，われわれの観念，また概念を築くための実用手引，さらには，多様な組立てを可能にする文法的な法則を構築する必要に迫られる。

あとがき

空間をメディアとして見る立場に立つと，空間の様々な事象に興味を持たざる得ない。しかし一方，これらの事象に関する知識にはきりがなく，

結果を求めるのは難事である。当小論は初めて小テーマのまとめを試みたもので，結果はやはり，粗末，とりとめない文を恥じる。

〈恐れる心〉は恐怖症・神経症につながるあやうさを抱えながら，一方では精神の活性化に一役買う。恐いもの見たさ，恐ろしいことしたさの遊び，ゲームの数々が巷に溢れる。危険にあえて身を曝し，血圧上昇を楽しむための快楽はスポーツとして冒険としてお膳立てされ，人々の多大なエネルギーを消費させている。

人間の空間においては全き安息，平穏こそ至上のものであることは間違いないが，時として人々は自からの神経に逆らうものを呼び込む。平安を平安として感じるためにも逆回路を通らざるを得ないのである。

それは〈恐い空間〉の存在を意識することから始まる。

空間デザインにおいては，人間の性格，心情にどこまで沿いながら空間形態を築けばよいのか，大きな問題である。実は造形性の面から見れば，平安無風に逆らうほど社会的評価を高く得やすい。

それらは恐怖空間にという訳ではむろんないが，不思議にその要素は深く潜行していく。

そういう傾向はやはり人々の性格，心情に少なからず沿っているのであろうと考えられる。

ところで，平田武靖『精神の存在論12・ユング心理学の系譜』に心理学のユングが実際に体験した「週末のバカンスをバッキンガムシャーのとある賃貸契約の別荘で送る」時に遭遇した怪異現象のことが記されている。

その部屋で寝ると進退麻痺感，不快な臭気，水滴音，打ち砕く音等の幻覚，生首の幻影に脅かされて眠れなくなる。このような「家に固有の憑依性が付着している」ことを認めざるを得ないような事象である。

このように空間形象に直接関わりなく，空間が畏怖すべきものになる現象もあり得るであろう。

またわが国にも多い怪談風説において，化物屋敷，あるいは家々に取り憑く妖怪等の存在によって畏怖すべき空間と化す事例もあり得る。

しかし，これらは空間の形態と直接に関わるものではなく，何等かの因果を遠く求めなければならない。従って，空間が持つメディア機能に直接に乗せる要素とは考えないほうがよいと思われた。もちろん，これらをそれとなくイメージに乗せる手法はあるかも知れないが，造形手段によって表現するところに直接関わり得る枠からははみ出すものと考え，従って，当論では空間の形態，及びその視覚的状況に関わるところのものを頭に置くにとどめた。

参　考　文　献

「空間の経験」イーフー・トゥアン著　山本浩訳 筑摩書房
「恐怖の博物誌」イーフー・トゥアン著　金利光訳 工作舎
「恐怖とは何か」村瀬学著　JICC出版局
「人間と気候」佐藤方彦著　中央公論社
「怪談の科学」中村希明著　講談社
「遠野物語をゆく」菊池照雄著　伝統と現代社
「淋しい場所」オーガスト・ダーレス著　森広雅子訳　国書刊行会
「狂気の構造」小田晋著　青土社
「見える家と見えない家」叢書・文化の現在
　○火から遠い沈黙　清水　邦夫著　岩波書店
「建築の形態言語」ウイリアム・ミッシェル著　長倉威彦訳　鹿島出版会
「詩としての建築」瀬尾文彰著　現代企画室
「ｉｓ24号」
　○日常の物語のなかの〈家〉
　　鈴木志郎康『家の中の殺意』をめぐって　松本小四郎著
　○化物屋敷考・家の怪異　宮田登著　ポーラ文化研究所
「ｉｓ12号」
　○精神の存在論12・ユング心理学の系譜「怪談」平田武靖著　ポーラ文化研究所
人生読本「住まい」1980年　河出書房新社
思想の科学「家」1981年no.4-7　思想の科学社